

# SHOW-HISシネマフルーツ

★★★★



Data

2023-140

監督・脚本・編集：北野武

原作：北野武『首』

出演：ビートたけし／西島秀俊／加瀬亮／中村獅童／木村祐一／遠藤憲一／勝村政信／寺島進／桐谷健太／浅野忠信／大森南朋／六平直政／大竹まこと／津田寛治／荒川良々／寛一郎／副島淳／小林薰／岸部一徳

## みどり

「信長もの」、「秀吉もの」、「家康もの」はNHK大河ドラマをはじめ、メチャ多いが、「世界のキタノ」こと北野武監督の新（珍？）解釈による、「光秀もの」も加えた本作の特徴は、タイトル通り首を巡る物語と、もう一つ、男色を巡る物語だから、さあ、お立ち合い！信長と森蘭丸の男色関係はよく知られているが、まさか信長と光秀も・・・？

ストーリーの軸は「謀反人・荒木村重を連れてこい！」と命じた信長が、「働き方次第で俺の跡目を指名する」と宣言したこと。ヤクザの跡目争いならそれもありだが、血縁が重視された戦国時代にそんな設定ってホントにあり？

他方、本作に見る、加瀬亮による信長の怪演は特筆ものだが、ビートたけしの羽柴秀吉役はいかがなもの？少しほの年齢のことを考えなければ・・・。

村重の謀反をストーリーの軸に据えた着眼点や良し！また、信長VS秀吉、光秀、家康の駆け引きも面白い。しかし、光秀×村重による中年男同士の絡み合いは如何なもの？そして、首（首級）を巡るこだわり（？）の顛末は？

### ■■北野武監督最新作！評論家は揃って大絶賛だが・・・？■■

「世界のキタノ」こと北野武監督の最新作たる本作は、チラシによれば「構想30年、日本が世界に誇る映画監督・北野武が放つ“本能寺の変”」「戦国の常識を覆す。」ものらしい。2023年のNHK大河ドラマ『どうする家康』では、松本潤が若き日の、“か弱き（？）徳川家康”から、征夷大将軍の跡目を息子の秀忠に譲るのか、それとも政権を関白秀吉の遺児で今や立派に成長した秀頼に返還するのかに悩む“たぬきじじい”となった家康までを見事に演じ分けたが、そのストーリーはNHKらしく、“通説”に沿ったものだった。

しかし、本作はまさに「戦国の常識を覆す」もので、北野武監督の新解釈（珍解釈？）

でいっぱいだ。したがって、その賛否はハッキリ分かれるはずで、「こりやダメ！」と感じる評論家も多いはず。ハッキリ言って私はそちら側だが、なぜか新聞紙評では有名な評論家たちが揃って絶賛ばかり。こりや、一体なぜ？一体どうなってるの？ちょっとおかしいのでは！

### ■■■着眼点や良し！荒木村重をストーリーの軸に！■■■

「天下布武」を旗印にした織田信長の家臣団には、新旧さまざまなキャラクターが揃っていたが、その中の1人である荒木村重の反乱はあまり有名なストーリーではないので、知らない人も多いはず。しかし、秀吉の軍師・黒田官兵衛がその説得（翻意）に失敗し、長い間幽閉されてしまった物語は、岡田准一が主演を演じたNHK 大河ドラマ『軍師官兵衛』（13年）等で詳しく描かれていた。北野武監督が「構想30年」を経て脚本を書き、ノベル『首』まで出版した本作は、冒頭、その荒木村重（遠藤憲一）の反乱からスタートするので、それに注目！その着眼点や良し！

### ■■■加瀬亮が怪演！こんな信長ははじめて！その賛否は？■■■

尾張の領主たる地位を父親から引き継いだ織田信長は、最初に上洛を目指した大名・今川義元を1560年の桶狭間の戦いで討ち取ったことによって、一躍“天下不武”を掲げる勢力にのし上がった。そして、彼の人物像は、過去、幾多の映画、TV、小説等で語られている。そんな蓄積の中で、織田信長の“最大公約数的な人物像（イメージ）”は日本人に共有できているが、本作はそれを真っ向から破壊、否定するものだ。

坂本龍馬をこよなく愛する武田鉄矢が、歌手として成功し名を挙げてきた中で実現したのが、『幕末青春グラフィティ坂本龍馬』（82年）だった。そこでは、それまでのイメージとは全く違う、明治維新のヒーローたちの若き日の泥臭い青春像が描かれており、脚本を書いた武田鉄矢が自ら演じた坂本龍馬像も新鮮で興味深かった。それと同じように、いや、それ以上に、本作で加瀬亮が演じた織田信長はそれまでの信長のイメージとは大きく異なるもの。とりわけキムタクこと木村拓哉が『レジェンド&バタフライ』（23年）（『シネマ52』206頁）で演じたカッコいい信長とは大違い。尾張弁でまくし立てるその姿の異様さは認めるとしても、“あの品のなさ”は一体ナニ？もちろん、これは俳優・加瀬亮が「世界のキタノ」として北野武監督の演出に忠実に従った結果の“怪演”だが、その賛否は？

私は本作のそんな演出は全然好きになれないが、それ以上に気に入らないのは「働き次第で俺の跡目を指名する」と武将たちに指示する信長の姿（インチキ性）だ。信長の跡目は長男の信忠をはじめとする直系の子供たちに決まっているはず。それなのに「働き次第で俺の跡目を指名する」とは、北野武流のヤクザ路線のハッタリ（フェイク）なのでは？そんな脚本が本作のウリかもしれないが、私はそんな脚本には全然賛成できない。

### ■■■光秀は適役だが、秀吉役も家康役もその他も違和感が！■■■

本作は、これまでたくさん作ってきた、信長と秀吉を中心とした紋切り型のストーリーではなく、荒木村重を最初に登場させ、「村重と明智光秀との信頼関係」と、「村重と羽

柴秀吉との対立関係」を対照的に浮かび上がらせたところがミソ。その点はさすが“世界のキタノ”こと北野武監督の見事な着眼点だと私は敬服！また、本作で光秀役を演じた1971年生まれの西島秀俊は、年代的にもキャラ的にも適役。しかし、秀吉役を1951年生まれのビートたけしが演じたのは如何なもの？また、徳川家康役を1951年生まれの小林薫が演じたのも如何なもの？ちなみに、信長役を演じた加瀬亮は1974年生まれだから、信長役の俳優と秀吉役や家康役の俳優との年齢差は20歳以上もある。

『幕末青春グラフィティ坂本龍馬』で坂本龍馬役を演じた当時の武田鉄矢は30歳前後だったし、同作に出演した多くの歌手やお笑い芸人たちもみんな若かった。それに比べれば、いくらなんでも、70歳代のビートたけしが当時40歳代だった羽柴秀吉役を演じるのはあまりにも無理がある。本作で秀吉の側に常時付き従うのは、弟の羽柴秀長（大森南朋）と軍師の黒田官兵衛（浅野忠信）だが、この2人とも老齢な秀吉に振り回されている感が強いのも違和感がある。さらに、信長を演じた加瀬の“怪演”に対して、この3人の演技は、まるで“3人漫才”だ。

他方、秀吉の周りに集まる、元甲賀忍者の芸人ながら、謀反人・荒木村重を偶然捕らえたことで秀吉に仕えることになる曾呂利新左衛門（木村祐一）や、元百姓ながら秀吉に憧れる難波茂助（中村獅童）の“異色ぶり”にも私は『幕末青春グラフィティ』のようには共感できない。さらに、信長側近の森蘭丸（寛一郎）や弥助（副島淳）にも大きな違和感がある。1980年生まれの桐谷健太演じる服部半蔵だけがヤケに若いのも、如何なもの…。

## ■□■信長の跡目は誰に？そんな争点がホントにあったの？■□■

本作のストーリーの軸になるのは、信長が配下の将軍たちに対して、反乱を起こした荒木村重を捕らえて「俺の前に必ず連れてこい！」と命ずる中で、「働き方次第で俺の跡目を指名する」と宣言したことだ。もちろんこれは、本作の脚本を書き、ノベル版まで出版した北野武監督独自の見解だが、あの時期の50歳直前の織田信長に、「自分の死後、跡目を誰に譲るか」という“争点”がホントにあったのか否かは大きな疑問だ。私に言わせれば、「天下布武」に向けた“信長の野望”は今まさに大展開しているところなのに、たかだか村重の謀反くらいで信長が「働き方次第で跡目を指名する」などと発言するはずはないのでは？

そもそも信長は「人間五十年 化天のうちを比ぶれば 夢幻の如くなり」という、民俗芸能「幸若舞」の演目『敦盛』を愛していたが、それはあくまで趣味の問題であり、自分が50歳で死ぬと予測していた可能性は、まず考えられない。したがって、本作のストーリーの軸とされている北野武監督のそんな争点設定はそもそも最初から無理があると言わざるを得ない。

本作は『アウトレイジ』3部作（10年（『シネマ24』88頁）、12年、17年）の“戦国版”だと言われているが、ヤクザ社会なら、必ずしも父親から息子への“相続”に固執せず、「働き方次第で跡目を譲る」と宣言して、有力な子分衆のより一層の発奮を煽り立てるという手

法もあり得るが、血族を重視し、父から子への権力承継が当然だった戦国時代に、50歳前の信長がそんな現代ヤクザまがいの手法で、部下たちの発奮を煽り立てたというのは、北野武監督独自の成り立たない見解だと言わざるを得ない。

## ■□中年男同士の男色模様にゲンナリ！品の無さも顕著！■□■

日本の戦国時代、武将たちが合戦に明け暮れる毎日を過ごしていたのは当然。そして、そこには女はないなかつたから、武将たちは有り余る性欲をどう処理したの？それが“男色”という形になっていたというのは、どうやら本当らしい。他方、若き日のビートたけしがハラ軍曹役で出演した大島渚監督の『戦場のメリークリスマス』(83年) (『シネマ49』124頁) では、終盤に登場する、反抗的な俘虜長を処刑しようと日本刀を抜いたヨノイ大尉に、デヴィッド・ボウイ扮する陸軍少佐セリアズが近づき、その頬にキスをするシーンに驚かされた。また、大島渚監督の『御法度』(99年) では、松田龍平扮する新選組の新入りの美男剣士と、浅野忠信扮する同期入隊の隊員との男色（衆道）模様が妖しげな色彩を放っていた。

他方、織田信長と信長の小姓として仕えていた森蘭丸との間に男色関係があつたことは公然の秘密のようだが、本作を観ると、2人の男色模様がクッキリと！私はそんなシーンを観たいとは全然思わないが、北野演出によるそのシーンのどぎつさ（品の無さ）は・・・？それはそれで仕方ないのだが、ええつ、まさか親戚関係にあつた荒木村重と明智光秀との間にも男色関係が・・・？村重の謀反を巡るストーリー展開は興味深いのだが、中年男同士のベッドシーンは、さすがにゲンナリ！

さらに、織田信長は森蘭丸のみならず明智光秀にも衆道において惚れていたかのような描写も・・・。今や LGBT を扱った映画がテンコ盛りの時代だが、「信長もの」、「秀吉もの」の映画まで、そんな視点から描く必要はないのでは？私は中年男同士の男色模様にゲンナリ！その品の無さにもゲンナリ！

## ■□村重を巡る信長vs秀吉・光秀・家康の駆け引きは？■□■

「天下取り」を目指す50歳直前の信長と、信長に仕える秀吉・光秀・家康とのハラの探り合い、駆け引きは過去の NHK 大河ドラマ等でさまざまに描かれてきたが、そこには一定の通説（定説）がある。それを前提としたうえで、例えば「信長は女であった」などと完全にひっくり返してしまう説（珍説？）は、それなりに面白いが通説から完全に離れてしまう“異説”になってしまい。しかし、北野武脚本による、信長と秀吉・光秀・家康との「信長の跡目」を巡るハラの探り合い、駆け引きは、通説を踏まえながら、さまざまなかつて北野独自の視点を加えたものになっているから興味深い。

本作の軸はあくまで前述のように、信長が村重を「生きたまま捕らえて連れて来い！」と命じたことに、秀吉・光秀・家康らがどう応えるかということにある。ところが、村重の行方が容易に知れないことに苛立った信長が、「村重の反乱の黒幕は家康に違いない」と考え、「家康の暗殺」を光秀に命じたところから、事態が奇妙な方向にズれていくことにな

る。すなわち、一方で、策士の秀吉は、家康の暗殺を阻止することで信長と光秀を対立させようと目論み、他方で、家康を排除したい信長は、京都・本能寺に茶会と称して家康をおびき寄せる計画を光秀に漏らしたから、こりや一大事だ。そして、信長からそんな命令を受けた光秀は、密かに匿っていた村重に対して、「これは・・・天命だと思うか?」と問いつつ、遂に信長の首を獲る決意を固めることに。他方、秀吉は家康を巻き込みながら天下取りのために奔走することに。

そんな「信長の跡目」を巡って、めまぐるしく動いていくストーリーはメチャ面白いので、しっかりその展開を楽しみたい。

## ■口■本能寺の変から中国大返し、そして山崎の合戦へ！■口■

定説によると、また2023年のNHK大河ドラマ『どうする家康』によっても、本能寺の変の時、毛利攻めで苦労し、応援を求めていた秀吉が、光秀を打倒するべく即座に戻ってくるとは、光秀はじめ誰も考えていなかったはず。家康は運の強い男だが、本能寺の変の時は、わずかの家来と共に堺に逗留していたから、命からがら伊賀越えで三河の国まで逃げ帰るのが精一杯だった。

つまり、信長は有力な武将たちをすべて京都から天下不武のために「方面軍」として各地方に派遣していたから、肝心の京都を光秀の謀反によって奪われてしまった以上、それがしばらく続ければ光秀に天下（跡目）が巡ってくるはず。光秀はそう読んだし、各方面的戦いで動きの取れない武将たちもみんなそう考え、地団駄を踏んでいたわけだ。ところが、秀吉だけは毛利軍と奇跡的な和睦を成立させた後、直ちに「中国大返し」を決行したから、光秀はビックリ。「山崎の合戦」で秀吉を迎撃ったものの、兵力で勝る秀吉軍の勝利となつたわけだ。

通説でもそうなのだから、本作が描くように、光秀による信長暗殺が秀吉の策略によるものだったとすれば、「本能寺の変→毛利との和睦→中国大返し→山崎の合戦」はすべて秀吉の読み通りだったことになる。しかして、北野武監督の“新解釈”による「中国大返し」から「山崎の合戦」への展開の面白さは・・・？

## ■口■タイトルに注目！首を巡る北野演出は？その賛否は？■口■

北野武監督作品は、昔から暴力色とバイオレンス色が強いのが特徴だ。そのため、当初は反対説も強く、賛否両論があったが、「世界のキタノ」と称されるようになると、いつの間にか反対説は衰退し、新聞紙評では絶賛記事ばかりが目立つようになった。そんな状態が数十年間続く中で1951年生まれの北野武監督も70歳を超えたが、なお自ら秀吉役を演ずる意欲を持っているうえ、暴力色、バイオレンス色へのこだわりも衰えていない。それは本作のタイトルを『首』としたことからも明らかだが、北野演出では、胴体から首が離れていくサマをいかに演出するの？そして、その賛否は？

その手始めは、村重の一族郎党の首を跳ねるシーンから始まるので、それに注目！する

と、本能寺の変では、信長の首はいかに？『レジェンド&バタフライ』では、木村拓哉演じる信長が、綾瀬はるか演じる濃姫と共に脱出したうえ、大船に乗つての南蛮への新婚旅行と洒落込む姿に驚かされたが、北野演出による、信長の切腹は？そして、信長の首は？

他方、秀吉の天下取りの第一歩は、毛利攻めを急遽和睦で終わらせ、“中国大返し”を強行したうえ、「山崎の合戦」で光秀を討ち取つたところからスタートしたが、そこでの光秀の首は？通説では、光秀は居城の坂本へ逃れる途中、落ち武者狩りの百姓たちの竹槍によつて致命傷を負い、自刃した光秀を家臣の溝尾茂朝が介錯したところまでは諸説が一致しているらしい。しかし、その首がどうなつたのかについては諸説があり、①茂朝が居城の坂本へ持ち帰つた、とも、②難を逃れるために一時土中に埋められた、とも、さらには③秀吉方の手に落ちて刑場などに晒された、とも言われているが、三条白川橋を南に下つたあたりに、“明智光秀の首塚”とされるものが残つてゐるらしい。他方、『京都坊目誌』によると、隠されていた光秀の首は発見された後に胴体と繋ぎ合わせて、栗田口刑場に晒されたとも言われているらしい。しかして、本作ラストに見る北野演出による光秀の首は？その贊否は？

2023（令和5）年11月29日記